

研究課題	外国語における I C T やデジタル教材を活用した 「楽しい英語授業の事例集」の開発
副題	～日常的な I C T 活用による授業改善～
キーワード	ICT 活用、思考力・判断力・表現力
学校名	高松市立川添小学校
所在地	〒761-0312 香川県高松市東山崎町 207 番地 1
ホームページ アドレス	http://www.edu-tens.net/syoHP/kawazoeHP/

1. 研究の背景

グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上のため、英語教育改革が推進されている。新学習指導要領では、中学年に外国語活動、高学年に外国語が位置づけられ、今年度から先行実施が始まった。本校は、平成29年度から高松市教育委員会指定「英語教育モデル校」として、「自ら学び、いきいきと学習する児童の育成～対話的な学びを通して、言語能力を高める～」というテーマを掲げ、研究を推進してきた。1・2年生は英語活動として年間17時間（週1回20分）、3・4年生は、外国語活動として年間35時間（週1回45分）、5・6年生は教科「外国語」として年間70時間（週2回45分）の教育課程を編成し、英語教育に取り組んできた。しかしながら、外国語の授業に慣れていない教員が多く、授業研究等を中心として教員研修も行ってきたものの、依然としておよそ50%の教員が外国語の指導について不安感をもっていた。また、新たに取り組むべき教科「外国語」の指導、毎時間の学習指導案や教材作成、授業の打合せについて時間確保などゆとりがないことも課題となっていた。

新学習指導要領の先行実施期間中、文部科学省からの新教材（高学年『We Can!』, 中学年『Let's Try!』）が導入され、担任にとって不安がある音声面での指導については、デジタル教材を活用することが期待できた。また、デジタル教材等で視覚に訴え、繰り返し練習して表現力を高めること、リズムやイントネーションなど英語らしい音声を身に付けること、新たに中学年から段階的に行う文字を「読むこと」「書くこと」などの指導について音声から文字への緩やかな指導を行うには、ICTの活用が有効ではないかと考えた。また、高松市教育委員会から、昨年1月に高学年の教室に電子黒板が設置された。そこで、ICT（電子黒板等）やデジタル教材を活用した外国語や外国語活動についての研修を行い、それを集めた「楽しい英語授業の事例集」を開発すれば、多くの教員にとって役立つはずである。そして、電子黒板の利点や電子教材を活用しながら、英語指導について担任の不安感を軽減するとともに、児童にとって楽しく、コミュニケーションを図る基礎となる能力を育成したい。

2. 研究の目的

- (1) 外国語の授業において、電子黒板やデジタル教材を使った実践を行い、「楽しい英語授業の事例集」を開発する。
- (2) 英語の指導について担任の不安感を軽減するとともに、児童にとって楽しく、コミュニケーションを図る基礎となる能力を育成する。

3. 研究の経過

表1は、今年度の研究の過程を簡潔にまとめたものである。今年度の研修の中に、ICT 研修を取り入れて、外国語活動及び外国語の研究と平行して取り組んだ。

表1 研究の過程

時期	研究の内容	評価のための記録
4月	校内研究の組織づくり	アンケート調査（教員）
5月	第1回ICT研修（電子黒板の使い方）	指導者・参加者からのコメント
6月	電子黒板やデジタル教材を活用した授業実践開始 研究授業① 4年 外国語活動	
7月	第2回ICT研修（電子黒板の効果的な使い方）	アンケート調査（教員・児童）
	1学期の実践の振り返り。データの分析	指導者・参加者からのコメント 指導者・参加者からのコメント
	校内研修（理論研修、デジタル教材の開発）	
9月	研究授業② 2年 英語活動	アンケート調査（教員・児童） アンケート調査（教員） 参加者からのコメント
11月	香小研高松支部メディア部会研究会	
	公開授業 5年	
12月	2学期の成果・実践のまとめ。事例集を作成。 「香川の教育づくり研究発表会」で成果発表	
1月	第3回ICT研修	
2月	「かがわ教育フォーラム」で成果発表	
3月	1年間の成果・課題の整理 次年度に向けての展望	

（1）チームとしての指導体制づくり

外国語が教科化され、授業時数を確保したものの、外国語指導経験の少ない教員が、毎時間の英語の授業をどうやって楽しく進めていくのが課題であった。そこで、楽しい英語の授業を行うために「チームとしての体制づくり」を行い、「ICT やデジタル教材を活用して、楽しい英語授業を展開する方法」を考えた。「チームの体制づくり」として、外国語授業実践教員が中心となり、全教員が協力して授業準備を進める。楽しく授業を展開する方法として、毎時間の学習指導案は、学年団の外国語授業実践リーダーが作成し、教材、ワークシート、リフレクションシート等は学年団で準備する。放課後等に授業の流れをしっかりと打ち合わせを行うことにした。こうすることで、教員が次第に英語の授業に対する不安感や負担感が軽減され、英語の授業実践に次第に慣れてきた。

（2）教員研修

楽しい英語授業を展開していくためには、教員研修が不可欠である。そこで、「理論研修」「指導力向上研修」「英語力向上研修」「ICT・環境研修」の4つの視点から研修を行った。

① 理論研修・指導力向上研修

大学の先生による講義や師範授業を通して、英語授業の最新情報や指導のポイントを教えていただき、授業のイメージをもつことができるようにした。また、定期的に校内研究授業の指導をいただき、指導方法等を修正し、より効果的な指導を求めて研修していった。

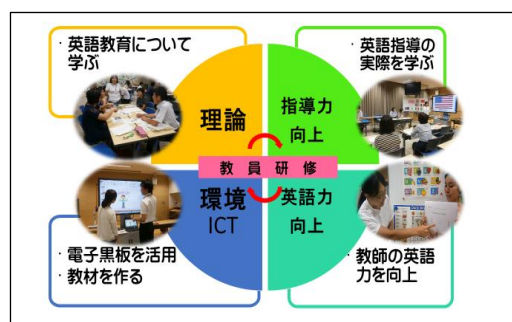
② 英語力向上研修

簡単な英語を授業の中で使えるようにするために、クラスルームイングリッシュの研修を行ってきた。ALT がクラスの中で使っている英語をメモして自分の表現に生かせるようにした。また、給食前にかかる英語の歌を児童とともに聞いたり、ALT との会話や授業の打ち合わせもジェスチャーを交えながら英語で行ったりした。このように、日常の中で、自然と英語を聞き、英語を使えるようにしていった。

③ ICT 研修

すべての英語の授業で電子黒板を活用するので、全教員が手軽に、抵抗なく ICT 機器が使えるように定期的に ICT 研修を実施した。ICT 研修では、電子黒板の基本的な操作はもちろん、視覚支援ツールとして、具体的な指導の場面でどのように活用することが効果的かを考察していった。最初、操作方法に不安が強かった教員も定期的に研修することで、次第に慣れ、活用できるようになってきた。

図1 教員研修



【電子黒板を操作する教員】

(3) 英語や異文化に触れる環境づくり

英語教室を2つ設置し、どちらも電子黒板を整備した。1～4学年が学習する「EGG ルーム」は、ベンチをコの字型に配置し、活動しやすいように工夫した。また、5・6学年は「文化・情報センター」で学習することとした。高学年は書く活動も増えることから、机・椅子を使用し、「EGG ルーム」と同じくコの字型の配置とし、言語活動がしやすいようにした。それぞれの教室は、児童にとって楽しく、英語や異文化に触れることができる環境を整えた。各教室には、CDや絵カード、アルファベットカード等の教材を整理し、すぐに使えるように整備した。また、児童の発案によるボランティアタイムでの「EGG ルーム飾り付け隊」で作成された飾りを掲示したり、ハロウィンやクリスマスの時期になると、行事の飾り付けをしたりするなどして、楽しい雰囲気を盛り上げるとともに、児童の英語学習の意欲を高めていた。



【低・中学年はEGGルーム】



【高学年は文化・情報センター】



【児童のボランティアによる掲示】

4. 代表的な実践

(1) デジタル教材づくり

校内研修の中で、3年生用の英語のデジタル教材づくり 「“How many strokes?” 私の好きな漢字は何画でしょう？」に取り組んだ。相手の好きな漢字を、漢字の画数をヒントに答えるという動画を作成した。教員も英語でコミュニケーションをしながら、楽しんでデジタル教材を作成することができた。このデジタル教材は、授業でも活用し児童の英語学習への意欲を高めることができた。



【How many strokes?】

(2) 外国語・外国語活動における実践事例

ICT やデジタル教材を活用して、楽しい英語授業を展開するために、ICT を活用した効果的な場面を考えて、以下の実践を行った。

① 2年生 「Transport のりものによって」

○活用場面：歌やチャンツで英語の音声やリズム、基本表現に慣れ親しむ。

電子黒板で、身近な乗り物（バス・電車・フェリー・飛行機等）の写真を提示し、チャンツのリズムに合わせて乗り物の名前に慣れ親しんだり、“What’s that?” “It’s a (an) ～.”という会話のやりとりを楽しんだりした。

児童は、日常生活の中でバスやフェリーなどカタカナ語として乗り物の名前を知っているので、電子黒板に身近な乗り物の写真を提示し、英語ではどのように言うのか知りたい意欲を高めた。乗り物の写真を1枚ずつ提示し、英語の名前が分からない場合は“What’s 電車 in English, please?”を使って尋ねるよう促した。一つ一つの乗り物の名前が英語らしく発音できるように、JTEの言い方をよく聞いて真似していった。電子黒板で提示される乗り物を瞬時に見分けながら、テンポよく、リズムに乗って発音していくことで、楽しみながら乗り物の英語の名前に慣れ親しむことができた。



【乗り物の名前を発音練習】

② 4年生 「ALPHABET アルファベットで文字遊びをしよう」

○活用場面：帯活動でアルファベット小文字の音と形を認識し、慣れ親しむ。

帯活動では、アルファベット小文字の形と音の識別をするために、電子黒板でアルファベット小文字を提示し、歌やチャンツのリズムに合わせて小文字の形に慣れ親しんだり、アルファベットフォニックスチャンツで、アルファベット文字の「音」に慣れ親しませたりした。3年生で大文字を学習して、アルファベットを順番に言うことは既にできているので、最初は、大文字と小文字の形の識別をする学習をした。電子黒板で、既習の大文字と小文字を同時に提示し、形を認識させながら一つ一つの文字の発音を意識させた。次に、「ABC Song」で、文字を視覚的に追って歌うことで、音声と文字を一致させるようにした。また、歌を歌いながら、アルファベットの小文字を空書きすることで、より音声と文字を一致させていく学習をした。帯活動では、このように、英語の授業を楽しい雰囲気にとともに、電子黒板を活用して、児童が楽しみながら英語に触れるようにした。英語に苦手意



【アルファベットを空書き】

識をもつ児童の不安感を軽減するため、児童が知っていることを楽しんで繰り返して行うことで、自信をもって活動できるようになった。

③ 6年生 「My Summer Vacation 夏休みの思い出」

○活用場面：夏休みの思い出を英語で書くときの英文の書き方の提示。

子どもたちは、初めて過去形の表現（went to, ate, enjoyed, saw）を学習した。最初に、ALTが夏休みの思い出を英語で聞かせ、音声に慣れ親しませた。その後、「聞くこと」「話すこと」の言語活動に取り組み、語句や表現に十分に慣れ親しませた。毎時間少しずつ段階的に、夏休みに行った場所や、そこで楽しんだこと、食べたもの、感想などについて友だちと伝え合った。そして、毎時間の最後に、音声で十分慣れ親しんだ表現を一つ取り上げて、電子黒板で示す教師の英文の書き方を見ながら、行った場所“I went to Kochi.”などの1文を書いた。英語の単語や英文の書き方をていねいに示すことができ、児童は毎時間1文ずつ書くことに慣れ親しむことができた。

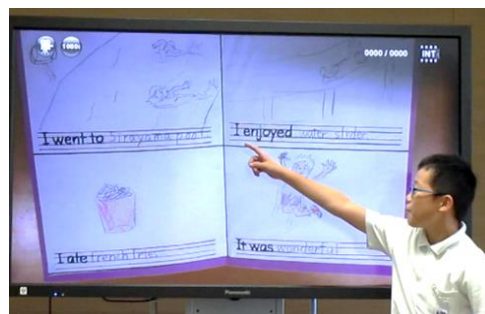
○活用場面：書画カメラで映し、英語でスピーチする。

単元のまとめとして、イラストと英文を添えた「夏休みの思い出アルバム」を作成した。単元の最後には、書画カメラを使ってアルバムを電子黒板に映して、英語でスピーチを行った。堂々と自信をもって英語でスピーチすることで、成就感を感じていた。

○活用場面：発表場面を見せて、動画で振り返る。
振り返りの場面では、自分や友だちのスピーチの発表の様子を動画で確認して振り返ることができた。「声の大きさ」「ジェスチャー」等による評価の視点を与えて、自分の姿を自分で評価することができた。この動画は、デジタルポートフォリオとして、保存する。次年度の4月に再度視聴することで、今後の学びの成長を確認できるものとなる。



【英文の書き方を師範】



【夏休みの思い出をスピーチ】



【発表の様子を動画で見せて振り返る】

5. 研究の成果

今年度、外国語におけるICTやデジタル教材を活用した「楽しい英語授業の事例集の作成」を通して、次のような成果があった。

（1）児童の英語学習に対する意欲の向上

児童のアンケート調査から、「英語学習は好きですか。」の問いには、平成29年3月に行った調査では、全体で86.3%だったのに対して、全体で95.0%の児童が肯定的な回答をしている。多くの児童が英語の授業を心待ちにしている様子がうかがえる。

(2) ICT機器の効果的な活用による分かりやすい授業の実現

電子黒板やデジタル教材を効果的に活用できる場面を考えて取り組んだことが、視覚支援ツールとして児童にとって分かりやすい授業を実現できた。96.0%の児童が、「電子黒板を使った授業が分かりやすい」「電子黒板が使った授業が好きである」と答えている。音声面での支援や視覚支援ツールとして有効であったと考察できる。

(3) ICTやデジタル教材を活用した学習指導案や教材をデータ化

楽しい英語の事例集の開発するために、ICTやデジタル教材を活用した学習指導案や教材をデータ化し、教員のアイデアを共有化できるようにした。「楽しい英語授業の事例集」を作成したことで、授業の流れやポイントをつかむことができ、今後外国語の授業を実施する上で大きな道しるべとなることであろう。また、学習指導案や教材をデータ化することで、業務改善につなげることができた。

(4) 教員の不安感の軽減や指導力の向上

英語の授業を行うのが不安であった教員もチームで相談・協力しながら指導にあたることができていた。研究開始時に行った調査項目「外国語の目標や内容についてだいたいイメージを持っている」では、50.0%の教員しか肯定的な回答をしていなかったが、12月のアンケート調査では、91.0%の教員が肯定的な回答をしており、自信をもって授業ができるようになった。また、90%以上の教員がICT機器の操作についても自信をもてるようになってきたことは、大きな成果であった。

6. 今後の課題・展望

課題としては、他の学年では、90%以上の児童が英語に対して肯定感があるのに対して、6年生では、英語学習の肯定感が86.0%にとどまった。その要因としては、6年生の学習内容や教材が、児童にはやや難しかったことがあげられる。そのため、6年生の児童の英語に対する意欲や実態を考慮した上で、教員は授業をコーディネートする必要がある。

今後、児童の学びのポートフォリオ化により、6年間の時空を越えた学びの姿や動画をEGGルーム等で残すことができる。6年間の学びの姿をしっかりと残すことで、児童は成長を実感することができるであろう。また、教師は自分の授業を振り返るとともに、児童の成長した姿にさらに刺激を受けて、授業力向上を目指すことが期待できる。

7. おわりに

本研究を通して、多くの児童が英語学習を楽しみと感じてくれたことは大きな喜びである。また、今年度最後の校内研修で今年の成果を振り返った際、教員同士が、楽しい英語授業の事例集の作成や「香川の教育づくり発表会」での発表等を通して、チャレンジを認め合い、学びを分かち合い、高め合うことができた。この研究を通して、教員の同僚性を高め、協働参画意識を向上させることができたと言える。英語の授業に苦手意識や不安感を感じていた教員が自信をもって英語の授業に取り組めるようになり、研究当初と意識が大きく変わったことは最大の研究成果である。貴重な機会とともに、研究を助成してくださったパナソニック教育財団に感謝し、本成果を今後の英語教育の改善・推進に生かしていくことをお約束したい。

8. 参考文献

直島町立直島小学校・直島中学校（2014）平成25年度研究開発報告書 100

香川県教育委員会義務教育課 直島町教育委員会（2017）授業風景が見える小学校英語指導 20